

# 投稿

## 変わる！ 変わる！ 歴史の風景

二階堂 玲太

最近、アンチ司馬遼太郎の方々が、故司馬作品の山脈に歴史事実の照明をあてて、虚像を浮かび上がらせることをしているようだ。それは、かつて梅原猛氏が法隆寺と怨霊の一連の古代史を発表していたことを思い出させる。彼の怨霊史学は哲学者のものらしくそうとうなものだった。次々とたたみ込むように書き上げ、毎月のように店頭の新刊の平積みの山を築いた。

あとになって、彼は、古代史家からたくさんのクレームがくるに違いない、むしろそれを待ち受け論戦に持ち込むつもりだったのに、史学会から何の反応もなかった、という不敵な嘆きに続けて、「それもそうだろう、これだけ発表してしまえば、相手だって全部読むのに死に物狂いになってしまう。論戦の意欲も消えてしまいうだろう」というようなことを豪語していたのには、私は思わず笑ってしまった。

「そうですね。そういう手もあるのですね」

司馬が生きている頃に論戦に持ち込もうとする方々を、私は寡聞にして知らない。機関銃のように撃ちまくる作品を俎上にあげることなど出来はしない。これは、梅原氏のユーモア的ずるさと共通するものがある。

でも、「故」司馬となれば、そうではなくなる。いくらでも批判できる。確かに、司馬は不都合な事実は見事に無視する。司馬が捨てた歴史事実を積み上げれば、別の歴史風景が見えてくるだろう。それを誰かしないかな、という待ち受ける気持ちが私にはあるが、なかなかご奇々な方は現れない。

まあ、これらのことについては私は傍観者だ。対岸の火事だ。寝そべて見ていれば良いと、図々しく構えているのも、教科書に記載されている歴史事実が私が教わった歴史事実と随分変容しているのを知っているからだ。そんなこと当たり前だ。誰だって成長するに従い、心に残っている子供の頃の風景はどんどん変わっているのだ。歴史だって時と共に変わるだろう。

最近、必要があって家族の歴史を調べたが、私が知らされていた事実とだいぶ違っていた。私は、虚構の中で成長したような感じがした。あの子供の風景の中に別の真実があったのだ。という諦観に少しならされたので、

「『土農工商』などないッ！お父さんの卒業後にアップデートされた歴史教科書の修正点のまとめ」というメールマガジンを読んでも「そうか、そうか」と鷹揚にしていられる。

「大化の改新の年号も違った、鎌倉幕府の成立年も違う、土農工商もなかった」

「それらはアップデート済だよ」

「鎖国もなかった。今では鎖国状態というのだ、鎖国とは明治時代の造語なのだ」

「何、先月の講演であたしは盛んに鎖国！鎖国！と云ってしまった。あれは間違いなのか！」と呆然としてしまった。どうすれば良いのだ。まあ、歴史事実も成長すると納得せざるをえないが、これとは別に、最近そんな仙人さまになっていられない新聞記事を読んできました。

かつて『江戸しぐさの正体』を上梓した原田実氏がこんどは『江戸しぐさの終焉』で虚構の江戸しぐさにとどめを刺すそうだ。それは良いのだが、気になる個所があった。

【傘かしげ……雨の日に狭い路地ですれ違う際、雨水が相手にかからないよう、互いに外側に傘を傾ける】

この江戸しぐさが気に入って、私は目黒の太鼓橋の近くで柳生家の侍に傘かしげしているように見せかけ、突然切り込んだ与太郎の話を書いたのに、傘かしげが、原田実氏の指摘のように無かったとしたら与太郎は随分間抜けではないか。どうしたら良いのだ。

仕方がない、みなさんと与太郎の間抜けぶりを笑うほかはない。与太郎は、日本文藝家協会編『平成19年度 代表作時代小説』（光文社）に所収されている、「困った奴よ」という題で、ある父と子の物語の中にいるので、読んで笑ってみませんか。

なんだか、回り道をした宣伝のようになりましたね。でも、よろしく。

（了）